

人間国宝・一龍齋貞水(講談師)の紹介

現在の講談界に多大なる功績を残した貞水は、「講談には守るべきものと、開拓するべきものがある」を座右の銘とする。2002年講談界では初、寄席芸界では柳家小さん師、桂米朝師に次ぐ3人目の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。

2009年には旭日小綬章を叙勲される。

講談の中でも大変重要なジャンルとされる怪談では「怪談の貞水」と異名をとり当代随一と称される。寄席の定席をはじめ、地域講談会、学校公演、ディナーショー

TV、ラジオ、2003年には講談師として初のヨーロッパ公演ツアーの実施と、その活動は多岐に渡る。常に講談の可能性を追求し続ける講談界の大看板真打。

惜しまれながら2020年12月に81歳でこの世を去った。

知っていますか?~10月1日は「国際音楽の日」です~

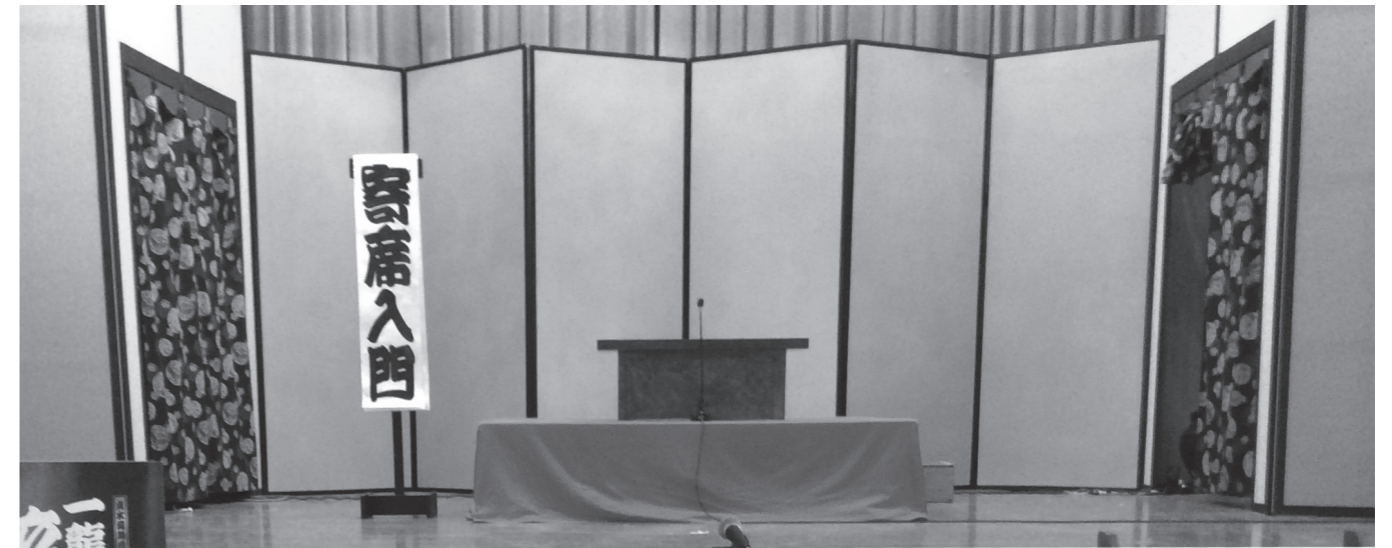
1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることとしました。日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

令和3年度

文化芸術による子供育成総合事業

一巡回公演事業一

講談



貞水企画室 講談への扉

「文化芸術による子供育成総合事業 一巡回公演事業一」

我が国の一流文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演ではできるだけ子供たちにも参加してもらいます。

○講談とは

講談は寄席で演じられ、落語と並ぶ我が国の2大話芸です。

歴史上で起こった事件や出来事を、物語としてより面白おかしく語り聴かせる大衆芸能です。

○講談の歴史

講談のはじまりは・・・

今から約400年前の慶長（江戸時代初期）に、徳川家康の御前で赤松法印という人が

「太平記」を読んだのがその始まりと言われていました。

講談が大衆芸能へ・・・

元禄年間（江戸時代中期）ころになると庶民を相手にした町講釈が始まり、今日まで続いています。

「講談」は当時「講釈」と言っていました。それは難しい本を小机（釈台）の上に乗せ庶民に分か

り易く読んで聞かせていたからです。

現在の講談でも・・・

・講談師（真打）を先生と呼ぶ。

・本が無くても、釈台を置いて演じる。

・一席を演じた後、「読み終わりです」と言う。

などなどは、その歴史の名残です。

○講談の道具

釈台：演者の前の小机。本来はこの上に本を置きます。

張り扇・拍子木（ツケ）：釈台を張り扇で叩きながら調子をとっ

て語ります。

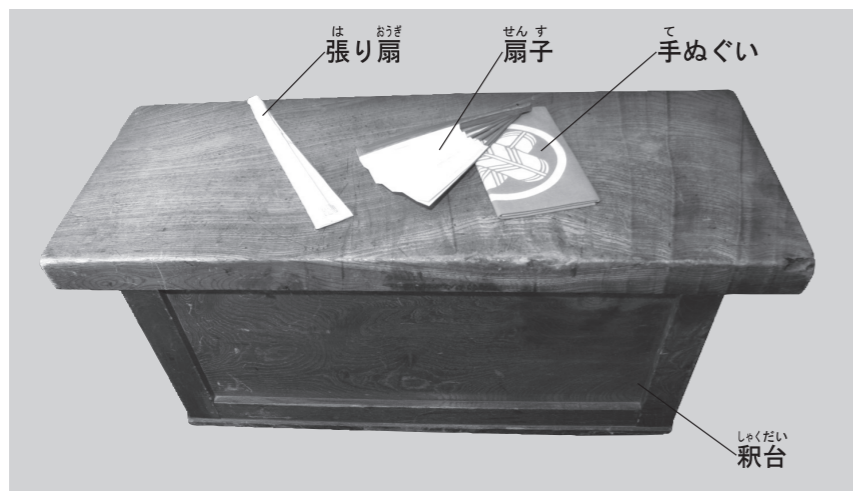
扇子・手ぬぐい：色々なものに見立て演じます。

○講談の種類

「源平盛衰記」など戦いを語る『軍談』。赤穂義士などの『お家騒動物』。大岡越前などが活躍する『政

談』。ねずみ小僧など泥棒の話『白波物』。庶民の生活の中の人情話を扱った『世話物』（※「怪談噺」

はこの中に入ります。）などに分類されます。



紙切り 林家正楽

講談を演じてみよう

プログラム

一、連続講談（後半） 前半はワークショップで

二、講談入門 ～釈場へようこそ～

①ワークショップのおさらい

②講釈場の解説

③本日の番組紹介

三、講談 若手

お仲間入り ～休憩～

四、講談発表会

五、色物

六、講談 大看板

